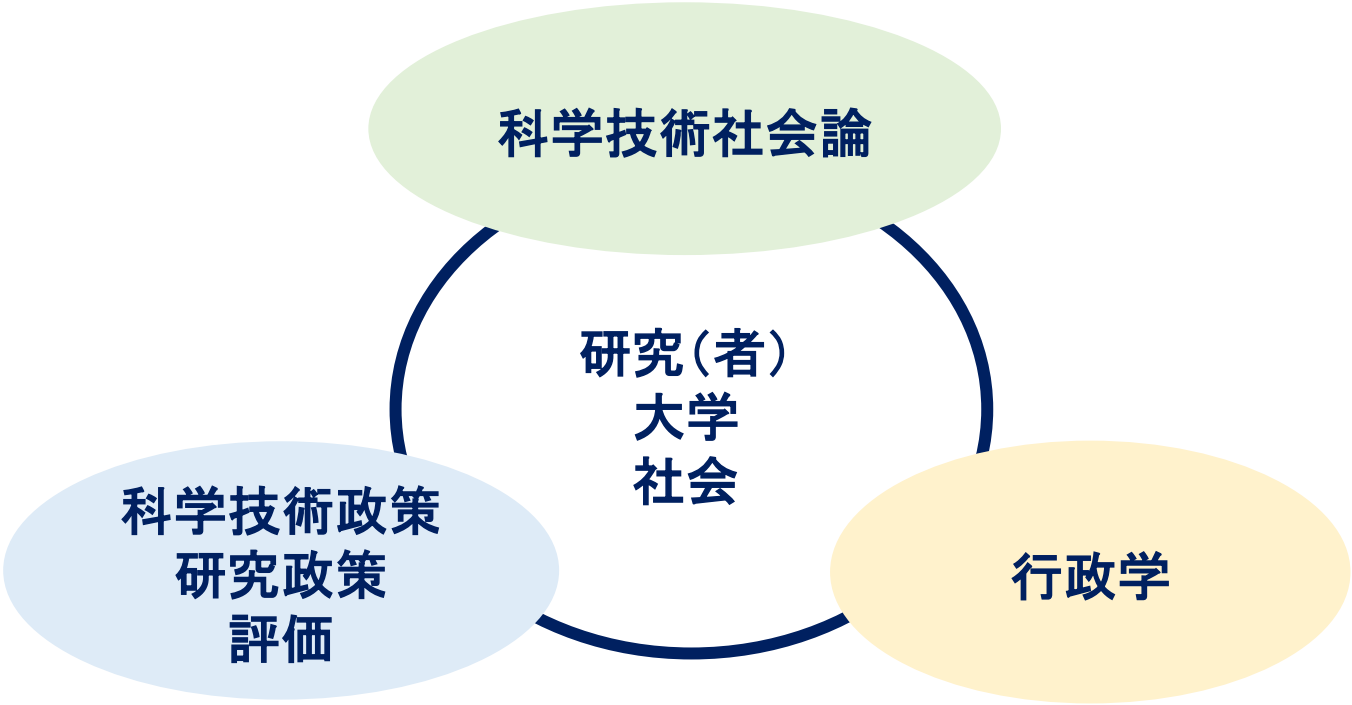
「研究力」の設計と現場：研究者インタビューを中心に

2022.03.15.　福本江利子

広島大学大学院人間社会科学研究科　特任助教

本発表は科研費19K15239の研究成果の一部を含みます

研究の足場



- 研究者の研究（者）観
- 研究者の戦略や行動
- 学術ジャーナル
- 大学と研究システム、評価
- 科学と社会
- 公共的価値
- お役所仕事

（研究者へのインタビュー調査、論文データ分析、理論系の論文執筆など）

設計と副作用

「研究力低下」は設計どおり？？

- 例えば、国立大学法人化は研究力強化のための政策ではなかった
- 驚くべき帰結や意図せざる帰結としてとらえられるべきではない
- さまざまな方面での努力は当然あったと思うが、結果としてそのような状況・・・

（研究力向上以前に）教育・研究活動の維持にかかわる構造的問題

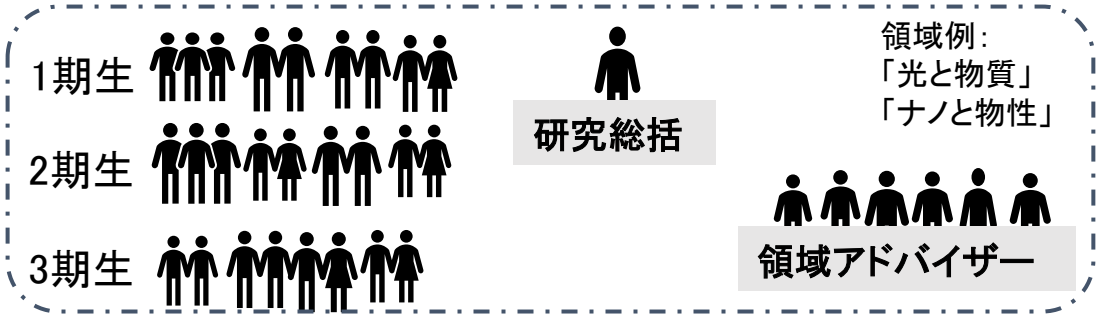
- 「わかりやすい」基盤的問題：大学院生の雇用、任期制ポストの増加、職員や教員数など
- 「わかりにくい」問題や副作用的問題：より見えずらい、またはじわじわ進行？
  - 各所に生じる事務仕事（レッドテープ）
  - 組織や研究者の適応行動
  - 蓄積性や複合性

参考：小林・福本（2021）国立大学法人化とは何だったのか：
科学研究の観点からの評価、『一橋ビジネスレビュー』69(2), 8-21.

かつての「さきがけ研究者」へのインタビュー

JST（科学技術振興機構）さきがけ　1991年度～

- 領域形成、ネットワーク型研究（個人型）



- 3,000～4,000万円／課題、原則3年半以内
- 挑戦性と創造性
- 累計98領域、2,882研究課題（約29課題/領域）
- さきがけ合宿、サイトビジット

インタビュー・データ

【対象】さきがけ経験者

【選定】終了後10～15年程度の5研究領域から16名＋総括1名

⇒かつての「有望若手研究者」

【内容】主に研究（者）の挑戦性に関すること

さきがけ経験、研究（者）観、パブリケーション行動

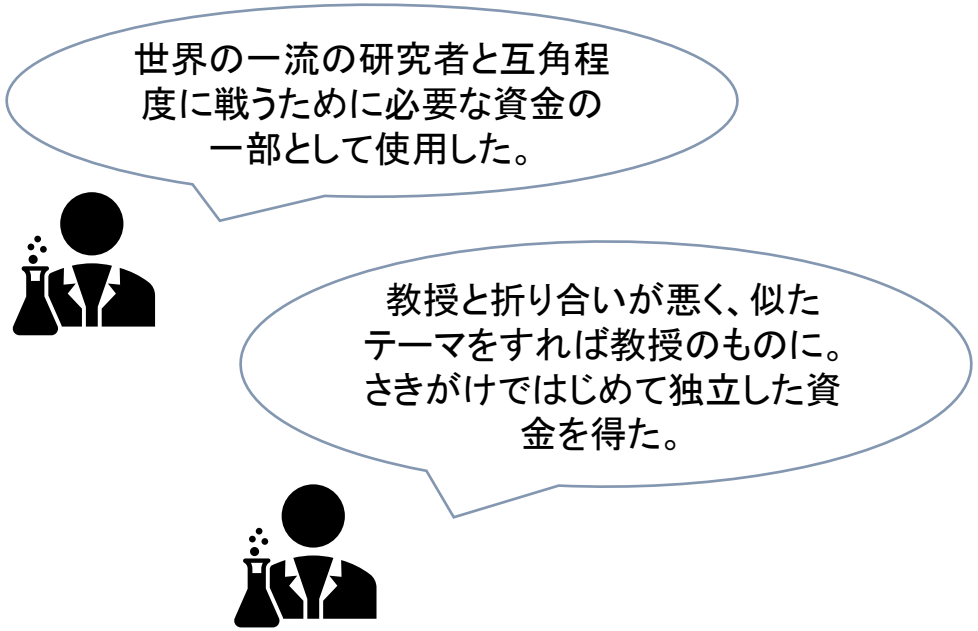
【実施方法】半構造化インタビュー（ビデオ通話）、匿名

※2021年8月末～収集継続中

※データの内容は、あくまで個別の研究者の見解
※そもそも「はじまりの研究」や挑戦的研究を好む集団

人を育てる仕組み～独立前後の若手へ～

- 独立（ラボ、資金、テーマ）
  - 独立ラボ立ち上げへの資金的助け
  - 教授から離れて自分のテーマを開拓
  - 恵まれない研究環境（人、資金、設備・・・）からの脱却
  - 温めていた研究アイディアを本格的に実行
  - ためらわずに国際会議や出張へ
- 視野、経験、人脈
  - 同世代の（異なる分野の）活発な研究者からの刺激
  - 師弟関係の枠から出て自分だけのコミュニティ
  - 合宿やサイトビジット等をとおしてのケア
- 誇りや後押し



研究者もさまざま：プリンス、シンデレラ、暴れ馬・・・（#S1）
研究者人生数十年で重要な論文、転換点となる論文は2,3報程度？

（インタビュー内容は、公開資料では省略します）

「研究力」の構造と文化

いくつかの視点

- かつての「有望若手研究者」にもリスクや競争
- 研究（者）のライフサイクルやタイプ
- 資金やラボの規模による構造的制約：目標設定と期待値
- 設計やフォローの重要性
- 診断と処方≠指標の羅列：適応行動や副作用も考慮

本来の問いは、どうしたら大学がよくなるか、よい教育・研究ができるか、
よい研究者が育つか・・・・・？

- 土台をしっかり（職員、院生含め）
- 引き算またはシンプルに？
- 研究（者）は楽しそうか？（楽しい≠ラク）